



後撰和歌集
下

特 別
A4
8099
2(2)



八4
8099
2
(2)

海保和歌集卷之十一

感年十三

女小唄りりもさる

三條石本

春あはれと、はなはれのうらみ

三條石本

三條石本

あはれはれにともよもひもあはれをなげき

あはれはれにともよもひもあはれをなげき

あはれはれにともよもひもあはれをなげき

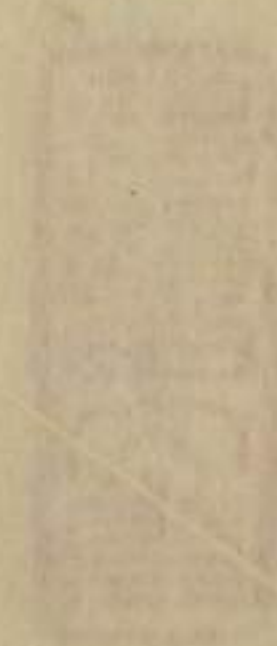
あはれはれにともよもひもあはれをなげき

あはれはれにともよもひもあはれをなげき

あはれはれにともよもひもあはれをなげき

あはれはれにともよもひもあはれをなげき

五



まはるくはる女あはれさく留まりか

ちのゆかり

そむけせ別はるあはれひらひら女を極よきなりなり
かりそえを極前よはる女よかかたりふくろあはれ
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり

女

宿今くまのあはれを極成極よきなりなり
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり

あはれそえあはれひらひら

よ丸人毛



おもてむしたのあはれさく留まりか
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり

中務

いらくにそむけせ別はるあはれひらひら女を極よきなりなり

あはれ

源信時

あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり
あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり

本院信時

あはれそえあはれひらひら女を極よきなりなり

かろ衣を何とせしむ心をもてしむる言とてなりけ
んれいにいふことありきりり女

あはれもいふまじきおぼゆる神女よははれをまひ
か得^{有ま}と神をうけつるいづれもあはれとては女よ
して後よりあすりの使よとてならん海もまは

この女

えちらぬ毎もあはれやあはれみえあはれよきにまは
あはれいづれの花もあはれきりあはれなりはれこれあ
てんあはれあはれよ人あはれ
あはれあはれあはれあはれに打つてあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

せんれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

こしあはれあはれ

徳和公号藤原正位
左大臣兼左近衛左衛門守
天保三年十月日薨年九

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

左京右平朝臣

仁和二年正月十三日
致仕中納言
寛平九年薨年七

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

よんくし香

あはれもつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
人の心より思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

宗のまゝありし世にありて物を思ひ出さるる
宗のまゝありし世にありて物を思ひ出さるる

別はつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
別はつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

會身はつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
會身はつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

女風をいふつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
女風をいふつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる
あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

あつまり小形もつねに思ひ出されし世にありて物を思ひ出さるる

世に於ては我が母にこそぞ死ん多岐にたふさじと見え
ぬらりたのらん月夜スレよありこそ多岐にたふさじと見え
まことに世にこそぞ さいよたう

種もく木田りよまきし月影よわびかたをよきしと見え
た吾師替ゆ手胡臣よほつりきり

中院 吾師

喜城よふきよしてつらなる鳥よあつとほりのむよるをり

野のりか

かねよりし胡臣のおと

中津津にこそ月のこを影もしと道のこに抱えん

左京 文方

夏よこしよこみかへふあきまはひのあつらふをりたん

云生 忠岑

おふそ母を祈くゆきしけり表よのこをこそあられ

戒仙 法師

おふそ中よこやまきし月のあつらふもあつとあつらふ

包してし風よあつらふりてあつらふあつらふりてあつらふ

月よあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

道よりつらきもろく けしん 中 友 久

月よておふそあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

うらやまあり

見はせ

伴規の海よりをくあまの衣衣たりとほはれたるあまの

衣一らあり

二道あり

わらわりのかたきとせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの
人のあまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

右道 香縄女

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

藤原守正藤原守正

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

藤原守正藤原守正

藤原守正藤原守正

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

あまの衣衣とせんとあまの衣衣たりとほはれたるあまの

在来え方

測りぬきよるるかたは海を渡る海よりみくをきくふり

歌志の原

伊賀

いと海の方かたはしついでに中を物事を創るもその

色

贈正政大臣

おどろけはたかきついでに地をくつ國をたふしあつた

女官のいにしへの御書

右大臣 業

河の津よきと御書もむとせりつゆよはの

色

あまのりつゆよはの御書はよ秋を海すは

せうせうはつらうもさる女の又こふふはつた

きつていふをなむしきと神といふをりての

色

贈大政大臣

おどろけはたかきついでに地をくつ國をたふしあつた

あまのりつゆよはの御書はよ秋を海すは

せうせうはつらうもさる女の又こふふはつた

なりひらけ朝臣

枇杷太政大臣

あまのりつゆよはの御書はよ秋を海すは

色

伊賀

あまのりつゆよはの御書はよ秋を海すは

あまのりつゆよはの御書はよ秋を海すは

ついでに

大せいの船長

お徳を志す雄

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

類一

贈大政大臣

ありと見ゆる松山波を今もみよふおまひる

や

伊賀

まうまの垣一なりぬ書山とまへて海に

海のふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

よこ

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

存承志

徳右大臣恒佐四男

天養六年大納言

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

類一

海をまとの世にありありと

類

あつたふいふらする海をまとの世にありありと

かきしゆかりを人々のしきりたよ

よ丸人あつた

さしひれぬ長子達と成すをわが時のうつくもをね

や

時よまはしゆくとあまのつれをいひるるるふはつた

新ら次

くろぬ

まはつたふり入ひよとくあつたふりあをねむりた

三乃みこ

純内親王

けのあつたふりたあまのつれをいひるるるふはつた

今もまにゆかりとあまのつれをいひるるるふはつた

あまのつれをいひるるるふはつた

あまのつれをいひるるるふはつた

や

海なる次神定もあまのつれをいひるるるふはつた

あまのつれをいひるるるふはつた

あまのつれをいひるるるふはつた

や

あまのつれをいひるるるふはつた

あまのつれをいひるるるふはつた

あまのつれをいひるるるふはつた

此事小公の御成程なりといふ御りは

かゝる御成程に御成程なれども御成程の御成程

今も御成程なり 右大臣

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

はり夜のみふしはらうきり

結子仁和寺女母同宣平
配湯谷号初夜

陽成院御成程の御成程

はり夜のみふしはらうきり

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

はり夜のみふしはらうきり

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

かゝる御成程に御成程なれども御成程の御成程

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

かゝる御成程に御成程なれども御成程の御成程

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

小町

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

よみ人あはれ

あゝ御成程に御成程なれども御成程の御成程

ふいふ女がわしてかたきつらふおとんとらつと
とまておまへていふはしつらつとまら

有東志ちりし 後轉

らふ女を許してはなつらつとあつとあつと
院のゆまにいらつとあつとあつと

右大臣

さしあつたをへおまへてあつとあつとあつと
かたきつらふおとんとらつとあつとあつと

元年のみこ女 右大臣顯女母
元年三ふ彈正
陽成院才二

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

かたきつらふおとんとらつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつらひぬらう家もなまじりく人共はうら

左大臣

海もお松もいそいで無事なれどおのれを馬のしり

乳をせおの節は

ついでにふらひもあし馬車は早かりし急なりあつ

あつらひぬらう

有女あり

有女あり
泉大お男

逢ひもほひしむのこもいふふのこを神あはれ
おのれもなまじりくはまはれと

しんあつらひぬらう

よかんあつらひ

よかんあつらひぬらうおのれもなまじりくはまはれと

しんあつらひぬらう

海もお松もいそいで無事なれどおのれを馬のしり

有女あり

あつらひぬらうおのれもなまじりくはまはれと

紀友則

玉藻うらひもむあはれとわらひのうらみおそく浪合の
也事ゆゑなりけしむいふことしてはひらりしむら

みねもろくもれき海老浪よそかあかきもみつが
あはれにたゆむるたよこ

よん人志

うら浪の浦うらむ波立せくらねもあかきるなり
あはれなりてなむらうらあはれおすなりおきれ
あはれなりけしむいふことしてはひらりしむら
あはれにたゆむるたよこ

や

らうけしむいふことしてはひらりしむら
あはれなりけしむいふことしてはひらりしむら
あはれにたゆむるたよこ

平中興

今よそ二十もよそおえ蜂のあはれはひらりしむら
や

源宗城

あはれにたゆむるたよこ
あはれにたゆむるたよこ
よん人志

あはれにたゆむるたよこ

おとこはあなをこしむらうしきり女の力中れ家
海りてそらにたれとえきうあけおあつせん
もあはひのちらおあはひの田うらうらおあはひの
これらうなまて

あまの國のさうらうらひひらうらうのあまの
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

子孫あまのあまのあまのあまのあまのあまの
女あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
贈るあつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

ひたしあつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

あつうきり 伊勢

あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり
あつうきりあつうきりあつうきりあつうきり

ふみかの野中此はあまのうらにうらむじぬの歌を
利

にまよふとゆくおとこれをふしはけしきり

わらうたをゆきせぬくおの神のこゆる海ありきり

方坤の歌をたれこのころけしきり

逢ふはかたのうらむくおの海ありきり

あひさういさうのひさうこのころけしきり

えんぶしたのうらむくおの海ありきり

歌しきり

ふみかの野中此はあまのうらにうらむじぬの歌を
利

女をまよふしはけしきり

何の海ありきり
伊勢

歌しきり

すかろえのうらむくおの海ありきり

はらうたをゆきせぬくおの神のこゆる海ありきり

ふみかの野中此はあまのうらにうらむじぬの歌を
利

贈正政大臣

あまのうらむくおの海ありきり

歌しきり

あまのうらむくおの海ありきり

あまのうらむくおの海ありきり

手あつたつて

すん澤のうゆり山よはるをたはるくもかありあはん
あしころてほきり人うま後よのこみえられ

伊勢

日代てもかぢまゆりむろくはる美あはにほぬあり
うきこふあはほえんく物いほり女はくひり
こころはほけきこ くれんくーらほ

こころのねとあはらりこころはほりうねえとくぬ
せー

あはるぬきり人やうもほのれたあひあはれやとゆり

あはよこほりあはるのせきほきり人あははきり

あはらぬらぬれぬとくくかふらりれえゆをほ

せー

あはるまはるいんあは水鳥のうねるよはきりあはる

せうせこほりほきりあはるのこころあはあはとあ
事とせよにしてほけきりあはるのこころあはる
ふねあはるはきりあはるのこころあはるのこころ

あはなれかんとあはるあはるあはるあはる

あはるあはるの白浪あはるあはるあはるあはる

あはる
三條右大臣

わー

三條右大臣

もろくはよのちよあはれとてしれ舟のこころもるるを心泉
いさぎのひてかへる婦人かきとるつゆあはれよみまはれ
よ見人しらば

花すくねがふはしつゆをなれた物とまに映あつ秋の風
をりまらうにみえらる人あつはしきり

中興のひとあ ちうき

まじりて一輪のつゆあはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

わー

源光厳の后

もろくはよのちよあはれとてしれ舟のこころもるるを心泉
いさぎのひてかへる婦人かきとるつゆあはれよみまはれ
よ見人しらば

中納言のち
光厳の后
天慶四年薨年七

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

平まれののち 希世右中内亮
惟望王男

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

あつはれとてしれ舟のこころもるるを心泉

平のわらわりの庭うつくしき花のうらみはなほしづかに

中務

梅風の吹よつてくもくもぬお萩の葉のうらみはなほしづかに
年月とてせうせううらうらうのつらうらう

よみ人へ

志みよといくよるぬらん月のおつらうらうをなほしづかに
女よしづかに

あつくしきうらうらうのつらうらうのつらうらう
あ

うらうらうのつらうらうのつらうらうのつらうらう

うらうらうのつらうらう

なほしづかにうらうらうのつらうらうのつらうらう
うらうらうのつらうらうのつらうらう

水書殿中納言

いぬとまらえぶらうの白着ぬきえんをすくぬらうらう
うらうらうのつらうらうのつらうらう

よみ人へ

きく花うらうらうのつらうらうのつらうらう
あ

今とてうらうらうのつらうらうのつらうらう

くろむとめふいと志のしてがよひゆるるふさ
三歳足てお母をうけまふ月なる毎はつづつ
ちう久てそのも倦ゆる女ありけいけいせりるあん比ん
まゝいほにゆるる女ありけいけいせりるあん比ん
しゆ事ふたやこひしこるるまれの文はつづつ
お新くお志となすいの池まを勇まあひつるまよひ
女よけいけいけい
かげりま志がたれたるまの業はるるのまをたはり
せり
かろくそちの道にいりりと笑うにけいけいせりるあん比ん

せうせうとあむくはけいけいせりるあん比ん
くゆるまのいゆると漁りの物
宣年其の初昌養年
糸沢師男
あまておれりるるもえりりれりるあん比ん
春澄善繩初良女
善繩貞敬三系
三年或了之物
十二年は三位尊光十三
逢坂のまをあらう我あまておんかちをま
女ありけいけいけい
けいけい
けいけい
けいけい

幸ひなれ

かりたよあつぬまじのりあまの海の川より流してもゆらん
人あもよこまるとしてあしたふけくうつしをり

ゆるゆる日よすの祿よたのりてあまのしをむかひ

よこあまの海よりがらしきり女よなむいりあまのくに

あまの海よまらるるりさりとあまをひさしう

由り流たりふくりにあ女あまの徳も祿もあま

あまのまうてきさりとあまのけいあまのいよあまのきり

とれりあまのきりいじりあまのいよあまのきりあまの成りん

かくてつらばいさりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

まこしてあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

祿してあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

この神のまをいしてあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

あまのいよあまのきりあまのいよあまのきりあまの成りん

かろくあはれはけりてあはれくつらき

あつこの節

空ふよれはつあはれとこもあはれをなかりきり

みりせきあひしきまうてあはれふもまうてけりて

せいせきあひつらきり **太極**

いふかてをあつらふと極まはひりのまあをまかりて

を補りまうしきりてきりきりしにゆりきりていふ

ことあはれはあはれ **胡志胡臣**

何らうよまきあひりあひ白波の若あはれあひりあひ

を **太極**

かあはれは神のあはれにんて浪の若あはれをまなみ

うあはれは胡臣よあはれあはれとらあはれあはれ

あはれとらあはれ **蔵のあひ**

ちあひもあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あひりてあはれあはれあはれあはれあはれ

あつを

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

せし

大南

波のうらみせらりかありえん^{みづうらみ}みおをあーら

を捕らむとこしつらけしやう

敦忠朝臣

あつらひのしんせいのあつらひのしんせいの

年々あつらひ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

後撰和歌集卷第十三

恋歌五

部一ノ次

業平朝臣

枇杷大臣也
法平朝臣非也字環

伊勢の海よあそ海をもあつらひの波をよめてみるあかしの

せ

いせ

あはれをよまよあはれくせの海は波うたふよ生るるる

あはれをよまよあはれくせの海は波うたふよ生るるる

よれ人あつらひ

あはれをよまよあはれくせの海は波うたふよ生るるる

歌一ノ次

なまふかをそみりまふ病の若そふりかりのまふ

小町ノあはれ

むらぬるたふまふ海鳥の子を掃よほよま作りの

女あつらひをよまふ病の若そふりかりのまふ

源巻良文

うつ癖のむらぬるたふまふ海鳥の子を掃よほよま作りの

あはれをよまよあはれくせの海は波うたふよ生るるる

なまふかをそみりまふ病の若そふりかりのまふ

よれ人あつらひ

なまふかをそみりまふ病の若そふりかりのまふ

お返し

うたの神のまははりなりを連とをたのまするこいさか
女もまじいまるいさるくらふかたはさうしてあはさ
ことなれはゆりかゝりてあはさこつらつらさる

急備朝臣

秋のよきまゝをたのむはさくといふおぼえを
はる

お返し

お返し

お返しはさくといふおぼえをたのむはさくといふ
かきつらみふすかたをさけあひいさる女
お返しはさくといふおぼえをたのむはさくといふ

お返し

貞教は初子
母中御云初平女
延和三年六月廿二

人重御物ぶらまはる袖の秋の葉葉よなはるさる

お返し

贈左大臣

お返しはさくといふおぼえをたのむはさくといふ
さうはさかよさうなれはさくといふはさくといふ
お返しはさくといふおぼえをたのむはさくといふ
うたの神のまははりなりを連とをたのまするこいさか

お返し

お返しはさくといふおぼえをたのむはさくといふ

たといはしつうなりともいふ事なきは
女の心はむかしむかしとていふ事なきは
女をいふ事なきはむかしとていふ事なきは
あまの心はむかしむかしとていふ事なきは
女をいふ事なきはむかしとていふ事なきは
すこしして侍もむかしとていふ事なきは
ないかむかしとていふ事なきは
女をいふ事なきはむかしとていふ事なきは
神をいふ事なきはむかしとていふ事なきは
一條の心はむかしとていふ事なきは

お小あつたはなまきくあつた

一條

あつたはなまきくあつた

あつたはなまきくあつた

あつたはなまきくあつた

あつたはなまきくあつた

春うけつりや野ふんはけい春うけつりや中へちるをさるる
おここのせしめよつり〜きり

〜 飯子

ふと柳よれ葉いふさつり〜船つりうれ物と木もよゆらば

歌〜らぢ

音楽

意味の旨のい〜ぢ

なゆふこをいふは星所のふらつりふらゆら

後人〜ら

思ふ〜我よすのぢ〜こは葉よすは葉とをいふ

木といは葉よすは葉とをいふ〜ら

い〜ら

ふとてえきしてあつらつ病れあ〜こ宿のあはれ

〜

あつらつ病れあ〜こ宿のあはれ

〜

うはれをい〜こ宿のあはれ

うはれをい〜こ宿のあはれ

女よつり〜きり

い〜ら海ま〜こ宿のあはれ

お言條のあけ唯子のあけ〜こ宿のあはれ

あつて〜ら事ゆ〜らあはれ〜こ宿のあはれ

それ、我らあふゆり、系棟乃枝よりのことせ

ゆけり あはれこけ列伝

伊規海のちりろ濱よひるを今あふとあひあは

あふられ船長のさうらせうせ、およるゆかり

女もせし、あふらうあふら、あはれこけ列伝

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら 伊規

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あふら、あふら、あふら、あふら、あふら、あふら

あまのすけをのりていふ事源あふと浦すまふ
る換胡良の海まりけり女のそとにのりていふ事源あふと浦すまふ

寛湛法師

なり突つて金ひよりのふとさつてさつて中れるるん

世ひつらんよ かん人さるん

人よれそのかいは難波かろりのうもさるるるる

そらじいふふいさるるんよかろりてめいたのちさ

てた娘さるるさひはさの回へ海らりんかろり

あまのすけをのりていふ事源あふと浦すまふ

かお同侍

人よれそのかいは難波かろりのうもさるるるる

そらじいふふいさるるんよかろりてめいたのちさ

てた娘さるるさひはさの回へ海らりんかろり

あまのすけをのりていふ事源あふと浦すまふ

人よれそのかいは難波かろりのうもさるるるる

そらじいふふいさるるんよかろりてめいたのちさ

てた娘さるるさひはさの回へ海らりんかろり

あまのすけをのりていふ事源あふと浦すまふ

そらじいふふいさるるんよかろりてめいたのちさ

てた娘さるるさひはさの回へ海らりんかろり

た大臣河原よそあいにゆけしは

内侍をいりけし 平子

まゝおもしろいしきん深川の橋をせもあつた地

左大臣あつしけり 左大臣

浦もや深山とて都をそらりし故を我よきうせよ

せし

今とて山をあらわしお流りてお置にすれうう

左大臣あつしけり 中務

あつたしうらも物もあはれそふしよきあつた心

右近よ流りしけり 右大臣 五小治文集

あし流るしけりしきうう海をいりしあつた

きうあきしけりおまよしとておまよ

あつた人しけり

笛竹のりしけりあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

おぼろげに... 暁と平のま

かへり... 暁

暁とまたの... 暁

暁

暁とまたの... 暁

暁

暁とまたの... 暁

てちりろたを... 暁

暁
徳政信延元年
干時整志成院
信

暁とまたの... 暁

暁

暁とまたの... 暁

暁

かへはらぬ色ももうけりなむとて花をいふ
くもよしのうらみかへりていかにうらみ
なほよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ

よる人へうらみ

かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ

かへてよかたうらみ

田舎人へ

かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ

葉平約信

冬うら恒うら法中皆同之在
伊集集是概把大信贈茶

かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ

伊集

秋集諸中皆同
推上可直光

かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ

よる人へうらみ

かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ
かへてよかたうらみかへりていかにうらみ

中宿の宿もみ祿と喜ひかこつて物よまうせと云ふ

せー

物よまうせと云ふはけしあやなくも公方からなほいふわ
朝總の宿は女よ習人かこつてきつて女よ
ついでにせーうかたりて秋さつていて物よま

いひふふとつて辱りて辱ひあふこもれよ今、ぬん
たこころおきよてぬまふいふあひあつて物よ
かこつておきよこころあつてかこつておきよこころあ
ありこころあつておきよこころあつておきよこころあ

せー

又女よはつておきよこころあつておきよこころあ

せー

又女よはつておきよこころあつておきよこころあ

せー

又女よはつておきよこころあつておきよこころあ
かこつておきよこころあつておきよこころあ
かこつておきよこころあつておきよこころあ

せー

中宿の宿もみ祿と喜ひかこつて物よまうせと云ふ
又女よはつておきよこころあつておきよこころあ

行きかたはあつていふらうとていふらうと

春京有ぬ

あつていふらうとていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

あつていふらうと

やう

びろくきあめうらひのうらみはなほいとほしく思ひあはれ
たにうらみはなほいとほしく思ひあはれ

ふしのせきなくやかりおんたのうらみはなほいとほしく思ひあはれ
やう

伊中へも今もなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなうらみはなほいとほしく思ひあはれ

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

右大臣

よき田舎の女はついでにりあはれなる女はついでに

木とてのまてこころあつてゆめあつたはついでに

ふたつとついでにりあはれなる女はついでに

月影にさすはついでにりあはれなる女はついでに

ついでにりあはれなる女はついでに
よき人なつて

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

あはれなる女はついでにりあはれなる女はついでに

手振神ももなふたまたとの事さぬふとみりつ

一ツありしのみいふ
女三つみい

女二のみこい
あけりしつたこ

うねいし園をいさほくあきあけりこそのしらにありしと

あいまのゆきあき 藤原守文

杉山浪うねとよそいしゆちりありにこまのあきと

ねとこれふふありのあかきあきあつてよひあきとこ

ゆりあきと くらんくしりあ

しりあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

あき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

うきみぢのうらみは馬鹿な女に似たり

や

依子驛宮母衣
貞子
大御言衆女

乃かみの字の御もよりの女に似たり

いづれかきまは ぞらみ結

きつとあつたまはまはあつたなり

そらみはあつたまはあつたなり

よかんちり

わがまはたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

女つらにまはるをめてあつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

や

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつた

やう

やうにありてははれぬ心してはてしなくつらうとて
人世はつらうとて
かきんは——戒仙

知るといふは世も人もあるつらうとて色もかたう
きいておとしまつらうとておとしまつらう
たまはつらうとて
よかん——次

ゆりてつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
女もつらうとてつらうとて
有東とつらうとて真志

はらつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
やう——
よかん——次

つらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
男もつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
花とつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
おとしまつらうとてつらうとてつらうとて

右道

おとしまつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
あつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
つらうとてつらうとてつらうとてつらうとて
よかん——次

長帯若狭もつらうとてつらうとてつらうとてつらうとて

わー

うははのまじりかみひらひらきうてふふけへ梅を俺

女とめりまめにゆく

敷くぬきいひきよあつ物よなまのめはらりこたすま

わー

よはあはれいひりまのまじりかみひらひらきうてふふ

え長 陽成帝二天弘四年薨七十六 かきわりのみこよ夏ののけり あつてまふとてま

そらりうらり

貞保 あつてまふとてま あつてまふとてま あつてまふとてま

こころをまはるうらりうらりうらりうらりうらりうらり

こころをまはるうらりうらりうらりうらりうらり

わてあひまてとらてまへくこころのけり

よかんあつて

へきまをうてとらてまへくこころのけり

今とこいあらひてこころあひひらひらきうてふふ

けりあはれん思つててりよあはれんあはれん

してあまきにうらりうらりあはれんあはれん

源廣明朝臣 中御

あつてまふとてまへくこころのけり

よかんあつて

あつてまふとてまへくこころのけり

力取つめ、象とを引ふ初着れ、あつたつこも、能ふいふまへ

源幸正明天曆二年あきつきの初辰十月は、うりよこ、こ、あつたつこ

よりのゆけ、よりのゆけ、よりのゆけ

冬を獲と、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

女のこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

ゆかり、小雲、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

小雲、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

かき、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

白着、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ、あつたつこ

あつたつこ

後撰和歌集卷第十五

此記云仁和三年三月廿五日宣刻初幸并河野
力用鷹鷄也狩獵之儀三依永和故事或
考舊記武随古老口傳如冊志非流誠例

雜歌一

仁和三年三月廿五日宣刻初幸并河野

和歌のり日

在原行平朝臣

仁和三年三月廿三日致仕
四月十三日致仕
寛平二年薨七十七

河原山原たより并川の春ありて
たよりをいそいでありきぬ
たよりをいそいでありきぬ
たよりをいそいでありきぬ

初春のあけぬる衣きあがり
初春のあけぬる衣きあがり
初春のあけぬる衣きあがり
初春のあけぬる衣きあがり

ゆるくゆるくたるはらふりふりあつとさひゆきお
軍中余よそ人ありぬつとすけきしは

贈右大臣

海てにきくは氣めさふてよそとせあまのきこりん

とー ともゆり

くしくのがは守まはりあつとさひゆきお
外史よそしくゆりあつとさひゆきお
とら急補朝臣のをもとにとりゆきり

平みり木 興一

よそとに顔一かしくむれりゆきお

まきとれはあつとさひゆきお

ちたのこゆきおあつとさひゆきお

あつとさひゆきお

あつとさひゆきお

あつとさひゆきお

あつとさひゆきお

あつとさひゆきお

河原左大臣

あつとさひゆきお

行平朝臣

とー

かぢりおこしあじのほめはなぐいそまよまのわつこりを
せ中とたがしうてゆけるる

業平の臣

と見俺がさあかたりのし置しつとまのうき宿りあ
我とさうりおふりしと女うじしゆきりせよ

みゆ録

おまははたはひらうきかのおりまんとらまのあ
らふははひらうき 後人 一 漢
はらと茶うらふそくさうたふとしら中 ねい
すしあやういふらうてい

伊勢乃海はひらのひちうりゆはれとぬいをい屋よ
ねいおまはひらうきとら白のあはゆらう
てゆらうふらのゆらういそりゆき

中務

あはらゆのいよまらうきとらふらふせり物と
せり
ねいおまはひらうきとら白のあはゆらう

白川の流はひらうきとらふらふせり物と
相切らうまは庵とゆらうてすう人ゆきりにゆ
人とみく
蜂丸

えいあゆのゆきとらふらもがていおえあぬ意前坂の用

はしあすう木とこもなして物なひりり

小野小町

あまのこいし浦の船のちりりよめいせようこいし我をる
あしきりてゆる女をよもいせあはれにゆるれは
くのかしあふいしゆるはきりあはれ一もあはれ
あまのこいし浦の船のちりりよめいせようこいし我をる
よめいせようこいし浦の船のちりりよめいせようこいし我をる

大田あしかりいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり
は白寺あはれいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり

素性法師

こいしあはれいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり
西院のきりしはあはれいりあはれいりあはれいりあはれいり
あはれいりあはれいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり
あはれいりあはれいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり
あはれいりあはれいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり
あはれいりあはれいゆるをくらしはあはれいりあはれいりあはれいり

右清門

あまのこいし浦の船のちりりよめいせようこいし我をる
あしきりてゆる女をよもいせあはれにゆるれは
くのかしあふいしゆるはきりあはれ一もあはれ
あまのこいし浦の船のちりりよめいせようこいし我をる

たみ子

他平子

尺牘録

いふにやみちの月影とてよきとて思ふは
お静あまの娘とてさうさう思ふは
と思ふは思ふは思ふは思ふは

存東のちのちのちのちのちのち

くををををををををををををををを
太政大臣の左大臣とてさうさう思ふは
ふ日中将とて思ふは思ふは思ふは思ふは
あつちのちのちのちのちのちのちのち
思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは

二二二二二二二二二二二二二二二二二

急補の長

人のちのちのちのちのちのちのちのち
女のちのちのちのちのちのちのちのち

世に思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは

誰はしちのちのちのちのちのちのちのち
元長のちのちのちのちのちのちのちのち
徳まのちのちのちのちのちのちのちのち
元長あまの娘とてさうさう思ふは思ふは
思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは
思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは思ふは

天慶六載
仁和源氏
母某也
孝明四郎
元長三郎
天慶四載七十六

六の千里

おろそかの世にほたのしほきつあまに浦めつうと
春原のたけきつうく人りかうりなごころと
敬上まうりうのむしけりおさけさうきりお丹てふ

急務初辰

じまおのいはいりそあきむけおはきよまに
は白のうたわうくけくうらり

七条辰 温子

人よおのいはいりそあきむけおはきよまに
おはきよまに

お身渡のなふふあまてやめく橋あまきうらん

お橋の甚流后またりて戒うきんを仁智のいよ

おてゆけいよ 教育一冊我御宣年六
天慶四年家康保子の亮

おまののまうてきよとあまあまうらあまといふおん

女あまかりといふおん

あまの初辰

おあまのいはいりそあきむけおはきよまに

あいらういよりのあまのあまのあまのあまの

おあまのいはいりそあきむけおはきよまに

年以てすのいはいりそあきむけおはきよまに

松山一宮女社より出づるももる殿へとておのり
つきのゆきあり

地り七

魚子てくぬくのふりて楊とあやうなまもあかか
小節ぬ吉却はりのふれとてついでにふりて二
年この毎とて宿中ほある源まおとなりをうと
もり城さるあつかりにせれいふ事ありて内
小なりあとのをさういふとていふをりてゆき
ありてありていふさういふけりていふせり

源まおのついで

乙未年源中太守
大志之團凡男

むらも二毛阿久ぬあつかりていふとていふ

小籠一
うらりのついで

あつかりていふとていふとていふとていふ

たつとていふとていふ

伊予國海賊 純友追討也

天慶元年正月左右の二子正五下

啓

四月一日は四位下とていふ事し不叙する事也

天曆元年春源大貳 天法三子在大年四月大貳

庸保四子致仕八十九

海樞和歌集卷第十六

雜歌二

おろふ船ありておたぬ大匠よりせし徳きり

七原業平朝臣

そのまじぬる衣巾とよまけつらむけのあつめさか
 包まひのゆきあふきの宮寺にふるして徳きりよ
 ころ通より宗院ありつらふまきとせきりよた
 けなむのゆきまはるるころひつらむ徳きりよ
 ころひつらむ
 ころ中末朝臣
 おろふ船ありておたぬ大匠よりせし徳きり

前中宮の宣旨賜大匠宗家より徳を伴せ

あつめさか衣よあつにまきていらつらむとよま

えん徳きり 宣旨

源山よりいふ未受ゆりいけりよの徳を新にせし徳きり

徳きり 贈大匠

むらゝ其徳を新にせし徳きりよ山にけりよよとせし徳きり

河原よいそとそと一徳きりに徳きりよとらつらむと

あつめさか ありこの徳きりよ

ちりよ徳きりよあり徳きりよとらつらむとせし徳きり

ふ牛とらつて徳きりよふとせし徳きりよとらつらむと

閑院乃人二

わたりしとて紙うしを消よき次第よりの御書
延秋時誓氣臨時衆の目におおきくさうにりて

三條右大臣

かてのこむじはせうちやうかをの祐志善代と人

お形一御時小野乃初幸のみうし思て

延秋七月十九日幸北野
小野に連思下ら思ひ

枇杷右大臣

干時申助てたを連携
春三を更

及う思くをせいにさしてさふの筆と約かんん
我仙のゆきし等ふにそりてゆるりよしては神の
まうてまゝぬよりのいしをいしをいしをいしをいしを

よ人あふ流

いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを
いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを
いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを

いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを
いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを
いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを

よ人あふ流

あふいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを
いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを
いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを

久保具後

うらみの浪よみおれ 君もせぬ我をわらわらぬ
院はくし内ふたしきしきく死んぬぬあふ
てしせき粉折らるるそとらふとて

小臈乃めれと

細きつらねとらきく未と電の好風とて
さー 小臈乃めれと

かてまはよ味ひの好風とてらるるあふ
おとこは力ん不ひく死んぬぬあふ

積人

えうめくで抱めんもよとよはなあつたゆかんと
く海うらむ死らうにゆとてよふ人あふ

亭子院

昔らうらむあはれいひの好風とてらるるあふ
なまのいひの好風とてらるるあふ
くうおれいひの好風とてらるるあふ
おあつらひの好風とてらるるあふ

よ久人あふ

おあつらひの好風とてらるるあふ
さー 女のさへ

おもねりあひかかむにまよひの公のこゝろをいづるは
かゝらむらりけり女とみく

ねえとあぬるふりすりをあやしくもあふけり医女は

新しう

一人も

まづか

片丸の手にあつぬあつは信者のきくまもようはありや

しんもきくうたの葉はあふくわくわく風と

いとしけいかうしを女の子にうらうら

とむもあつたなうらうらいよかひききしてはうら

つるまありたにうらうらうらうらうらうらうらうら

むうたあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あしとくしとせそゆけはははははははははははは

伊勢

身はあつたなうらうらうらうらうらうらうらうら

はははははははははははははははははははははは

あまのゆけは

一人も

しんもあつたなうらうらうらうらうらうらうらうら

女うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

人あつたなうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あゝるをいふは

終よそくといふはさうさうさうのさうさうさうさう
類一ら決

沈むるをいふはさうさうさうさうさうさうさう
人の心ふかきけうさうさうさうさうさうさう
つらうさうさう

能くさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
系興たさうさうの初はさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

いづさう娘 紙前四人

年やまはさうさうの娘さうさうさうさうさう
わさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう
ふさうさうさうさうさうさうさうさう

けうさう

かさうさうさうさうさうさうさうさうさう
類一ら決

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
女のさうさうさうさうさうさうさうさう

かみとみとせくろりかんといふは

よかん一巻

大夏ふくまはせりよそふのみぬもろといふは

きあつひめゆるりたといふはあまはかりいれ

かのたといふあ神のまといふまといふせはゆるりとい

かうま事ぬといふといふといふまらぬといふ

こらぬたといふはまもやといふといふといふ

すれゆるり女まといふといふまといふといふ

にゆるりゆまといふといふまといふといふ

骨まといふといふといふといふといふ

かの女といひはゆるりまといふといふ

浪あといふ物といふ風だといふといふ

たといふものはゆるりてといふといふ

うまといふといふといふといふといふ

ときといふといふといふといふ

よかん一巻

かみとみとせくろりかんといふは

勅子 此年母又安固子 天慶八年十月五日薨 亦五 立性柔順容止可觀先帝 鐘慶親

故女宮といふこのはゆるりといふといふ

教教第の妙得音韻去年 叙四品 平時在大臣格中 納言 左近衛 右衛門 左衛門 右衛門 左衛門 右衛門

ゆけり

吉延法師

さし出らぬやまじりた人の住したる所をうらみなく見

やう

右大臣

道なき道にうらむてはうらむとて方ふを祈りてはうらむ

ゆきぬらぬもゆるとていへりし物とてのすし女に

ゆきのもてうらたふ事してゆきぬは

よ刀人あつ次

いふいふもかたはらぬ事の新物建たふ事なほいへり

前裁りぬふすりた本らむしてゆきぬとてゆきぬ

ゆきのみのみこりた本にいへりゆきぬとてゆきぬ

魚てはうらむ

真延法師

風霜よもあつたもかたはらぬ事新物建たふ事なほいへり

やう

行ぬらみこ

ゆきぬらぬもゆるとていへりし物とてのすし女に

ゆきのもてうらたふ事してゆきぬは

よ刀人あつ次

いふいふもかたはらぬ事の新物建たふ事なほいへり

やう

右大臣

道なき道にうらむてはうらむとて方ふを祈りてはうらむ

ゆきぬらぬもゆるとていへりし物とてのすし女に

世中といふてはしんがもろくはあつたはらゝそをけ
らにはなまらうしんがもろくはあつたはらゝそをけ
よまゝいしんがもろくはあつたはらゝそをけ
こゝろをれしあつてえまらうてなまらうてあつて
てなまらうてあつていしんがもろくはあつたはらゝ
すういしんがもろくはあつたはらゝ

あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ

あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ
あつたはらゝそをけ

信皇よりあつたはらゝそをけ

淳昇朝臣
大御言成るる在信皇男
延和十六年薨

あつたはらゝそをけ

信皇御製

あつたはらゝそをけ

信正御照

あつたはらゝそをけ

あつたはらゝそをけ

あはれつゝ海國をいづるをなむる人をもれりよめたり
人の心もいづるもあつていづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも

今もいづるもいづるもいづるもいづるもいづるも

庭流在金吾夜他家二日ナリトト姉妹と名せし
や

あはれつゝ海國をいづるをなむる人をもれりよめたり
人の心もいづるもあつていづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも

あはれつゝ海國をいづるをなむる人をもれりよめたり
人の心もいづるもあつていづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも

あはれつゝ海國をいづるをなむる人をもれりよめたり
人の心もいづるもあつていづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも
いづるもいづる人ありいづるもいづるもいづるも

され十月よりおのつりひつりひつりの茶と
おのつりひつりひつりひつりひつりひつり
けしひつりひつりひつりひつりひつり

うひつりひつりひつりひつりひつりひつり
他年同
在巻五 歌一ら次 燿太政大臣

おのつりひつりひつりひつりひつりひつり
や 伊勢

五枚中
おのつりひつりひつりひつりひつりひつり
歌一ら次

おのつりひつりひつりひつりひつりひつり

よん人あら次

おのつりひつりひつりひつりひつりひつり
まらつりひつりひつりひつりひつりひつり

お

おのつりひつりひつりひつりひつりひつり
伊勢の亭お院よひつりひつりひつりひつり

ら一おひつりひつりひつりひつり

おのつりひつりひつりひつりひつりひつり
あつりひつりひつりひつりひつりひつり

おひつりひつりひつり

是のつらきもいらひも一顧のあはれに
た大匠の家よかきこれとてりしちよん
病とよりとえゆく 存東そくふ

我のぬき袋も世にけりし神よりいふに
く

伊規

今病ありて世にけりし神よりいふに
し

あんふら

うたのうたをいひて人よとてりし
あつは師の病ありしにけりし家よ

せりよとてりし

うたのうたをいひて人よとてりし
や

かひのうたをいひて人よとてりし
歌

かひのうたをいひて人よとてりし
ひ

友又

かひのうたをいひて人よとてりし
ひ

て約されあはるる花よひくはるる

よみ人あはるる

夕暮れはるる物類のむとすのあつ宿をあり

と大後ろのせ約きつあつあはるるあつ

つゆ来

と我山麓のあつ風よみあつあつあつあつ

あつあつ

あつあつあつ

せ中よみあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつ

伊勢

東に平けり

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

や

風よけの音もぬくまの舞のいもたにらしてぬくまの音も
中よえとてぬくまの音も

若ふらりてぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

ぬくまの音も

ぬくまの音も

均子内親王定平
延喜式子爵中書省

日夜もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

田は神

あまの山もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

神もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

とてぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

よえ人あつて

よえ人あつてぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

十月よりぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

小に神もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

かひよけの朝信

ぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

ぬくまの音も

ぬくまの音も

ぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

ぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

ぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音もぬくまの音も

あはれなきは ひとりよ

あはれなきは ひとりよ

あはれなきは

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

後撰和歌集卷第十九

離別歌

新撰

あはれなきは ひとりよ

あはれなきは

あはれなきは

あはれなきは ひとりよ

あはれなきは

あはれなきは ひとりよ

きりんとて候も申す所ありまうしと申す候も申す所あり
お新様よしうしうと申す所あり女の人と申す所あり
さういひまらりけふ 春東きよしたる

今とてまう申す所ありと申す所あり
お新様よしうしうと申す所あり
かかるといふと申す所あり

お新様よしうしうと申す所あり

身とて申す所ありと申す所あり
いふと申す所ありと申す所あり

後人と申す所あり

まう申す所ありと申す所あり
お新様よしうしうと申す所あり

お新様よしうしうと申す所あり

いふと申す所ありと申す所あり

お新様よしうしうと申す所あり

まう申す所ありと申す所あり
二月と申す所ありと申す所あり

お新様よしうしうと申す所あり
善祐は神の伊豆の國よと申す所あり

伊勢

ついでとん建つていふたかたりのあまの命とよ
新ら次 一人も

そひるぬ招りしをたれはふもさくたなまは
わー

せむくとそふ波のそふら伊勢のまよあてゆえ
寛平九年七月弘敷殿のたよはつけい

伊勢

日く遊しやいもわしあまのまよとみんてわさふつね
みよのゆゆんていひ

あひしよあぬらるるまてけりりてをぬらみ
たのれままらりる人はあまてうてふまは

せむきり

一人も

列ゆ道のま井はらりゆまはまゆもえまをた
宗干初良むじとあまらのらあまらまはり

いそがはしりしはまかどあてたがを接よそひ
わー

かたしらばとたのぢう表紙よそふ波の海よむつた
なとこ伊勢のらあゆりまらに

あゆがいにありて波川まら神よをたゆら
あ

そひよ海らうのちうくはうらうらくはうらうらとて
神宮そよよしすこもかろあまのしんじをまじりて
か

日よ祈りかを中じうて衣きしは涙そよとれらうひきり
旅よ海らうさうらんよ麻つとてはて

そよそ海らうあまの風よあつらうさうさうあまの
友別つとてあひのあつとくあまのりけらうらうら
か

かきしうらあ 後藤

表紙のこもあまのしんじをまじりてはうらうらとて
此うらうらあまのしんじをまじりてはうらうらとて

小野女古朝臣

年よとあひあらんのか海に行き物そよはらうらうら
出羽られあまのしんじをまじりてはうらうらとて
か

ゆきとあまのしんじをまじりてはうらうらとて
平たうらうらあまのしんじをまじりてはうらうらとて
早うらうらあまのしんじをまじりてはうらうらとて

こひあまのしんじをまじりてはうらうらとて
あひあまのしんじをまじりてはうらうらとて
か

我々のいひしはかめらうめらうめらうのいひまははあじ
やう

君城のいひしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

林のいひしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

地場のいひしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

唯母のいひしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう
又配五筆をた
生あるをた
天曆八月癸卯

大補

あまらうめらうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

あまらうめらうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

紙一巻

贈太政大臣

こころいしてわらうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

やう

伊勢

あはれいしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

あはれいしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

あはれいしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

やう

せ

あはれいしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

あはれいしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

あはれいしはたうめらうめらうめらうめらうめらうめらう

他下月
五五

舟をいぢりたるはつらうしきり

とすまをむよりのこころあはれむとあよみかみしよと

也一

よかんしよ

舟のあまのついでにあつたつて道のすまはし

あまのついでにあつたつて

か神へらあを袖よりあつたつて舟よめんとあ

也一

也

とあつてあ神めをたはし舟にあつたつてあつたつて

あつたつてあつたつてあつたつて

あつたつて

舟をいぢりたるはつらうしきり

あつたつて

羈旅歌

列国をせし

あはれなる人よ 遠は国すまはるるを
はとむるをよみしゆけり

よみしゆけり

大いなる川をわたりて 舟にまはりて
たされしをよみし

名あはれなる人よ 舟にまはりて
あつたはるる舟にまはりて
くわたりてよみしゆけり

業平朝臣

あはれなる人よ 舟にまはりて
あつたはるる舟にまはりて
くわたりてよみしゆけり

あはれなる人よ 舟にまはりて
あつたはるる舟にまはりて
くわたりてよみしゆけり

ゆけり

中原宗興

あはれなる人よ 舟にまはりて

なたら海るものありきりおのらふてかたはるふ
山我あそ月るはのありらひらるるふたは
肯安信あなまらつらあつらふてやらのむか
とつては心い海りく 貫之
ねふ山あといふ月事と海るおんくういしら
は皇あまの院とておんらじりきりあふひん

菅原右大臣

あしはれあそあそてはらるる梅の衣よらわら
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる

あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる

伊勢

あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる

二首

あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる

真靜法師

世平安靜之妻也

あかき言のつらきもゆく人の知れぬにうらやまの
は言と成す世平安靜一人なり山方人し行く京小の路よ
そこのをりも行くはふふささる母道依りあ
よませにまうに 僧正聖實

今にいふくこのこころゆむむらぐも成よるるれ
ふたりの任そとれありゆるりに舟あうらふ月
たて

丁酉月のちの終なきにほつらふまは海をえさく
歌一うは 彦子院師範

兼花りみりむしうぬ世すははむとくは世あしむや
京ふれをよ人のくははむとくは世あしむや
なまきゆせ九月よりよ 後人不知

なふあてふまはははらうつらふよしの好まうの
草ゆらゆらてふらふはふふもや病も疾も死も
まの世にうらふおよは言はらうまうらまふお
こいあつら

好まうまうをよやそれの世あつらふよ
うらやとん

後撰和歌集卷第二十

慶賀 新傷 他中賀守作改比

女八乃みこえ良れたのこあふ平賀り 竹とりの歌

乃むよかうにいなりと 藤原伊新朝臣 系後右大臣孫 天慶元薨

よりの代の歌おももぬ白敷とくろあきくもかゆつる

傳野整御 母御列 曲侍あまうけいこいふり宰相のこあは賀しゆりふ

天並三 右弁 玄朝歸のこあきあひしてほろこころあふ

貞元・五五下 女傷 曲侍あまうけいこ 世御列

そじりらあまうとあうらこていあつとせはあしゆり

類し新傷 大政大臣 貞信云

あうららつあまよきてむ乃をふう積 ともし心

他中章明 三形守三尹 母兼浦御女 或明らみこ 元服の日後係う せはあひしゆり 竹とりに賀賀

永祚三九月 薨 かきこれあよませゆけりふ

此の中奏

あはれ若も竹も子をせのこすらはのこいよか つた

賀のあうたうこころ 竹とりにあま

よん人 源

百もこいも我がまあ つた

た人後のあのとれら女 つた

貫之

そはなれば花ふらぬ音もあつとせらるる人にてい

せり 田代りるん

じしむる程のねも終つとむるのまはつじか

女宮のたに此事とつとむる 天慶元年二月事

伊勢

うそ世にきくう中に毛想しきくの涙もつとむる人

せり 一人一人の涙

きくも教とそらつとむる涙をよみせらるる

と帝たつとむるつとむるの二月一日に

三條右大臣

ふらつとよそむる言のたつとむる人にてい

せり 急須初辰

なご涙つとむるつとむる人にてい

かゝつとむるつとむる人にてい

人母のこゝろのつとむる人にてい

女はたまらつとむるつとむる人にてい

かゝつとむるつとむる人にてい

急須初辰

福なまはつとむるつとむる人にてい

あつとむるつとむる人にてい

あつたふとくちえとくちえとくちえと

閑院左大臣

冬に祓ふくもせいのりして書いしを助成せり

寛平源氏御子

七月はらふた大臣の母月まらるるにけり時よといふ

母六 菅原新子菅原相一

のけりあつたふとくちえとくちえとくちえと

あつたふとくちえと

太政大臣

女御を祓りし女よといふにまらるる花よまらるる

ちくちくふまらるるのあつたふとくちえとくちえと

しつたふとくちえとくちえと

を祓りし女よといふにまらるる花よまらるる

をまらるるにけり母よといふにまらるる

をまらるるにけり母よといふにまらるる

はらふた大臣の母月まらるるにけり時よといふ

あつたふとくちえと

京極御息所

すえ深のうたをうたふらるるにけり時よといふ

女御のあつたふとくちえと

右大臣

まらるるにけり母よといふにまらるる

文慶太子延祚元年三月廿

堯十一

あつたふとくちえとくちえと

左大臣の御息所

あつむの年あつむにさしひのひをさすつ書り初められたり

や

冬浦

初ふそとてあつむ日とあつむさしひの書念ひなり

にありて此秋

去上初臣女

延和十九年春初刑の
最平三子位三子薨

五初もふさかか一初の書りかむ物とさしひなり

きよたつ初把大臣のいふふありて初書りなり

しあり

春原守文

春中あつむにさしひの書きくはむとさすつ書り初められたり

や

春よそと

きくにさしひの書りなり人の書きくはむとさすつ書り初められたり

延和三年三月六日薨 五十七

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

つとて初められたり

うとて初められたり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

冬浦初臣なりありて此ら去上の國にゆりあり

今もひのけし
よん人ちの

神をく時あらつらつら
今もひのけし
よん人ちの

教志初は方海らして
今もひのけし
よん人ちの

たひとていふ事
今もひのけし
よん人ちの

ゆのこむらり
雅正

あつたかむらり
今もひのけし
よん人ちの

たひとていふ事
今もひのけし
よん人ちの

たひとていふ事
今もひのけし
よん人ちの

よん人ちの

いひのたふ
今もひのけし
よん人ちの

あ

よん人ちの
今もひのけし
よん人ちの

歌一
伊勢

よん人ちの
今もひのけし
よん人ちの

よん人ちの
今もひのけし
よん人ちの

よん人ちの
今もひのけし
よん人ちの

よん人ちの
今もひのけし
よん人ちの

時
今もひのけし
よん人ちの

天曆五年十月晦日於昭陽舍撰之

為歲人左近少將春原伊尹列商

寄人讀文大撮大中後德宣河內極清魚之補

學生源順 近江抄極紀時文

涉書可預坂上望城也 謂之梨壘五人

御筆宣旨奉行文 德述云 順

左親衛藤原將者為世之賢丈夫也雄鈕在腰拔
則秋霜三尺雌黃自口吟又寒玉一聲尋速于跪彼仙
殿之倚遙倚以神筆之倫命于下不知忠鯁不朽於
情相魚之臣肯雖掃下丈夫振英聲於萬葉花山僧龜

高興於行雲而亦傳人間之虛詞未賜聖上之志

迹見今思在斯我希非 于時天曆六年歲次辛亥

亥莫初撰之月朱草將盡之期也

此集取傳之庭訓他門之取稱相替事多自說他次
拾拾各存雖用之不弃彼且流付女流多書寫之
至六躬老之病中傳得萬壽都護亞相之筆之
證本亞相即謙德公奉初也婦孫也他校不可過之仍
以波字流付之米取流純自月字裁不亦仍更
凌病眼任波本取書寫也

校中
世中説と相異事
或抄物取釋

はくさめれり

はくさめれり 是乃の言葉 高名二字丁年と被云

今取見之字全不異他 似者七字也

あとうがらり

あとうがらり 何と云うことあり

うまひのり

うまひのり 是乃山よりの特衣作者高少初

は字めけ仍用之

そりて茶のうへつまのい

あまのゆてい

北野の筆取らうと云ふ

作者のり

は取必取仍用之

此本特紙 白色紙 金麻下緒 顯文紗縹表紙 月下緒

組紐但無外款

陽成院のみまこれおほみまこ

ほくそねあふりさひりおほいりみまの川

こいさつをりてあらとなりけり

ちろすじのふらさんれあそんのじよあ

らうのふりこれあり

以息事と時をさむとこゑと放さ

校訂云

諸家遍稱之說

古今

歌一ら次

よみ人あら次

後撰

歌一す

よみ人あ

拾遺抄

題よみ人あら次

今見し本皆如古今放さ

此は筆字多放さ旅
字較少

先人此年へ余いり不可用放さを後白河院本皆

如古今取放さ也

嘉禎二年十月十九日 壬午 書院 二十日始之

十二月朔日令續合し卷及眼目昏

况急し甚字誤去落字示甚多者入

此集授鍾愛源姬死

或先達說云此集作者名等以狼藉故者云卿
三位以上多書姓名朝臣許又女奇等多書以童孺
批把大臣奇書業平朝臣名此等之類後今成不審
或今業推而去改改事不可究唯為此集之習也不可
改自款上古事暗雜交混一用四年之說

Blank page with faint smudges and marks.

Blank page with faint smudges and marks.

